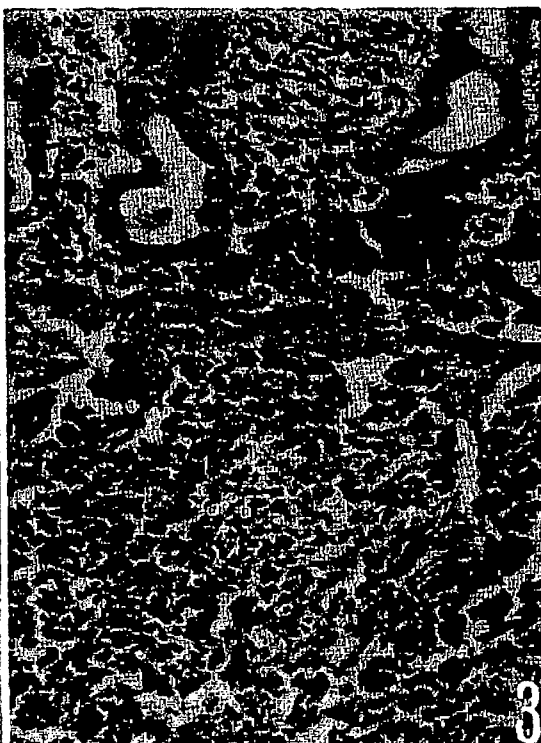


犬の大腸の淋巴肉腫

名古屋大学環境医学研究所出題・
第9回獣医病理学研修会標本 No.131



8才雑犬，牡， $\frac{2}{3}\times$ '68年死後剖検

臨床的事項：腹部が膨満し脱糞が困難であるので開業獣医師の診療を乞う。

貧血しているが、全身状態は異常はみとめられない。脱糞が困難というので外科的治療のため開腹した処、大腸は手拳大となり腫瘍が腸壁を瀰漫性に浸潤して淡赤色となる。予後不良と判断す。畜主の依頼により安楽死。

肉眼的所見：肛門から3cm上方において大腸は長径8cm、巾5cmに膨大し、漿膜は一部粗造となり、脆く、剥脱し出血を伴っている。腫瘍は腸壁に瀰漫性に浸潤し淡赤色で軟い。(写真1)腸粘膜のヒダは不明瞭となり一部長軸にそってみとめられる。粘膜は平坦で淡黄色、水腫性である。後腸間膜のリンパ腺は雀卵大に腫大し、淡黄色で腫瘍化する。臓器への転移はみられない。

組織学的所見：粘膜上皮は平坦で杯状細胞は小型で、

腸腺は細長く萎縮する。固有層は淋巴様細胞で占められる。粘膜はピラニが見られる。粘膜下筋板はみとめられる。粘膜内には淋巴球様細胞が瀰漫性に浸潤し、(写真2, 3,)萎縮した小型の腸腺が少数散在する。粘膜下組織は核がヘマトキシリンに濃染しており、原形質に乏しい淋巴球様細胞が浸潤する。筋層は淋巴球様の細胞が排圧性に増殖し、処々に変性した筋組織がとりのこされている。ワン・ギーソン染色で粘膜筋板の結合組織が網状となる処、離解する処とあり、また不鮮明となる処もある。腫瘍組織内には格子状繊維の増加はない。腫瘍細胞にはP. A. S. およびトリイズンブルーによる陽性顆粒はみられない。

大腸の粘膜下織から発生し筋板を破り粘膜へ、粘膜下織から筋層へと浸潤した淋巴肉腫の1例で、後腸間膜淋巴腺にのみ転移がみとめられた。